

R. マイケル・フィーナー教授へのインタビュー

京都大学東南アジア地域研究研究所 教授、
オックスフォード大学歴史学部 準教員、
海域アジア遺産調査 (MAHS) 統括責任者 / 主任研究員

Q1 海域アジア遺産調査 (MAHS) をどうして立ち上げたのですか？



MAHS の目的は、中国沿岸からアラビア半島に至る長い海のつながりを持つ南アジアの歴史に焦点を当てた新しいタイプのオンラインアーカイブを作ることです。広大で多様な海の世界は、何世紀にもわたって商業や文化循環の舞台となってきましたが、破壊行為や無秩序な開発、気候変動など、さまざまな人的・環境的脅威により、過去の物質的痕跡は、今日文字通り目の前から消え去りつつあります。私たちは、こうした文化交流の歴史を研究者や地域コミュニティ、NGO、政府機関の人々が何世代にもわたって利用できるよう活動しています。

この目標に向けて、MAHS は、地域全体の歴史的・考古学的遺跡のデジタルドキュメンテーションに取り組んでいます。現地調査チームによる踏査や記録を含む伝統的な遺跡分布調査と、RTK/GPS、写真測量、IIF を用いた高精細な画像撮影、地上・空中 LiDAR などの最先端技術を組み合わせた方法によって、遺跡の詳細地図、建築図面、ビデオ、イン

タラクティブな 3D モデルを作成しています。これらのデータはオンラインアーカイブに統合され、京都大学、オックスフォード大学、そしてプロジェクトが対象とする各国の国立図書館で長期的に保存されます。また、すべてのデータはオープンアクセスで、誰でも自由に利用できます。

Q2 調査地をどのように決めていますか？ 地域の人々はどのように参加していますか？



MAHS はモルディブ共和国での調査から始まりました。モルディブの歴史と文化を体系的に記録する同国で初めての試みです。モルディブの島々をくまなく訪れ、遺跡や博物館の収蔵品をマッピングし、カタログ化するという包括的な調査を計画しました。モルディブにある 1192 の島のうち約 85% が無人島のため、調査の多くは、現地調査チームが舟を使ったり、泳いだりして島に上陸し、ドローンを飛ばして島をマッピングした後に、陸地を歩いて、かつて人が住んでいた痕跡を探し、記録します。そうすることで、どの島に人が住んでいて、放棄されたのかを特定するだけでなく、古代のモスク跡や墓地、イスラム教以前の祭祀場などの遺跡を発見することもできました。

考古学や歴史研究の伝統が長い国では、よりの絞った調査手順を採用しています。例えばインドネシアでは、まず図書館やインターネットで調査を行い、これまで見落とされていた地域や、体系的に記録されていない既知の遺跡がある地域などを特定します。そして、県や郡レベルの役所に勤める現地協力者と相談してターゲットとなる遺跡リストを作成し、現地調査チームがその地域に滞在しているあいだ、可能な限り、現地調査チームから 1 ～ 2 人と現地協力者が共同で踏査を行います。こうしたオフィシャルなつながりだけでなく、地域コミュニティと協力して、小道の整備や草木の除去などの後方支援も行っています。最も重要なのは、調査地の各村でミーティングを開き、プロジェクト紹介、意見、提案、助言を求めることです。また、現地調査記録の背景情報として、住民の同意を得てオーラルヒストリーを記録したビデオを作成し、データベースに登録しています。このように、現地声を聞き、掘り上げることで、住民たちは、彼らが生活し、働いている場所で、文化遺産に対する考えや懸念を表明する機会を得ることができるのです。

Q3 MAHS のデータの活用についてお聞かせください。

私たちのプロジェクトは、幅広い用途に活用できるオープンアクセスのオンラインアーカイブを作ることを目指しています。歴史学者を中心とした学術研究プロジェクトであるため、海域アジアの歴史や文化に関する研究利用を第一に考えています。このプロジェクトの期間中、すでに世界中の多くの研究者の方によって、タカラガイ貿易の世界史やインド洋考古学、ペルシャのスーフィー碑文やイスラム

教の伝統の近代改革といったテーマで、本や論文に MAHS のデータを利用させていただいており、大変嬉しく思います。

しかし、学術研究以上に、プロジェクトのデータセットは、現地調査チームがあらゆる機材を駆使して収集した情報の有用性を最大限に引き出すように設計されています。そのため、考古学的な現地調査の枠を超え、オーラルヒストリーのビデオ映像や写本のデジタル化、建物の平面図や立面図、詳細な CAD 図面の作成、オルソマップや 3D モデルのための空間データの取得、過去の被害や現在の状況、将来の脅威に関するメモなど、さまざまな情報収集を行っています。これらのデータは、保存、遺産管理、災害軽減、観光、教育など、アカデミックな分野以外でもすぐに活用できるものです。後世の研究者にしっかりとした歴史的記録を提供するだけでなく、今日の地域コミュニティ、文化機関、NGO、政府機関などに、より身近なデータとして活用されることを願っています。

Q4 あなたの研究と「遠隔地を記録する」ことの重要性についてお聞かせください。



グローバル化が進む現代においても、地球上のある地域は、他の地域よりもはるかに深くつながっています。その結果、遠隔地やアクセス困難な場所での知識生産や信頼できる研究資料の作成が不足するという、複雑な副作用が生じています。現代の研究者の多くは、「フィールドワーク」というお馴染みのアプローチを採用していますが、その一方で、交通の便や特にインターネット接続がスムーズな場所を選んだり、よく知られた「専門家」に予めアポイントをとってインタビューを実施したり、フォローアップが容易で比較的アクセスの良い場所へ短期間訪問する、といった残念な選択をする傾向にあります。この類の仕事は、ここ数十年の間に社会科学の学術論文の生産性を大幅に向上させましたが、その

代償として、インターネット接続外にある場所や、さらにその先にある場所を疎外する結果となりました。

MAHS は、21 世紀の学問がこうした支配的傾向にあることに対抗するため、これまで体系的な調査が行われてこなかった地域や、短期間のフィールドワークによる快適な旅とは対極にある、消滅の危機に瀕した文化遺産を記録することに焦点を当てています。MAHS の現地調査チームは 7 名のフルタイムスタッフで構成され、1 年のうち最大 10 カ月間、島から島へと移動する旅人的なワークライフを送っています。そのため、4～6 週間ごとにベースキャンプを移動し、新しい地域を調査する必要があります。多くの地域は、ロジスティクスが複雑で、電力はごく限られ、インターネットのアクセスが悪い遠隔地です。しかし、現地調査チームはこうした地域での調査の訓練と経験を積んでいるため、一般的に見遇ごされがちな多くの場所でデータを収集し、地域コミュニティと協力することができます。こうした研究を行う大きな理由は、もし私たちが行わなければ、他の誰が、研究を行うための意欲や経験のある人材と機材を集められるのか分からないからです。脆弱な生態系や限界集落には、多くの危機遺産が存在し、永遠に失われかねない状況にあります。

Q5 なぜ日本に来ようと思ったのですか？



私は 30 年ほど前から、友人や同僚、家族を訪ねるために日本を訪問していました。しかし、2012 年に CSEAS で 6 ヶ月間のサバティカル休暇を取得する幸運に恵まれるまでは、ほとんどが 1 ヶ月未満の短い旅行でした。当時執筆中だった本を完成させるために充実した環境を提供してもらい、一緒に仕事をする素晴らしい仲間との出会いもあり、私にとってはかけがえのない経験となりました。また、

京都を新たに知るチャンスに恵まれ、すぐに京都が居心地の良い場所であることに気づきました。私はアジア、中東、ヨーロッパなど、海外の多くの国で生活し、仕事をした経験がありますが、京都は、単に興味深い「外国」の都市にいることを楽しむだけでなく、本当にわが家に帰ったような感覚を与えてくれることに驚きました。そのため、数年前に CSEAS の募集告知を見た時、迷わずこのポジションに応募することに決めました。採用が決まると、それまで拠点としていたイギリスのオックスフォードから、家族で移住の準備を始めました。私たちは 2020 年 3 月中旬に到着しましたが、それは幸運にも COVID-19 パンデミックで全てがロックダウンする直前でした。

Q6 研究に興味を持ったきっかけは何ですか？

私の故郷である大西洋に面したマサチューセッツ州セイラムは、かつてアメリカの商業と文化の中心地であり、アジアとの海上貿易の基盤が築かれた港でした。セイラムの船は、スマトラ島西岸に定期的に寄港していたのです。私は子供の頃、遠くスマトラ島やインドネシアの港へ航海する話を読むのが大好きで、自分もそんな旅をしてみたいと夢見ていました。そのため、アメリカでの学部留学中に、多くのインドネシア人学生や、刺激的なインドネシア人の教授に出会えたことは幸運でした。インドネシア人のコミュニティは私を歓迎し、学部を卒業した後にインドネシア旅行を実現する手助けをしてくれました。それ以来、私はインドネシア諸島のさまざまな場所に戻り続け、さらにその先には、この島々が長い時間をかけてつながってきたアラブ諸国、モルディブ、インド、中国といった多くの場所を探索する旅をしています。

インドネシアの宗教と法律をテーマにした大学院での研究は、インドネシア人や彼らのコミュニティとの関係を数十年にわたり深め続ける人生を築くのに役立ちました。この間、私はさまざまな言語や学問分野を学ぶ機会を得て、より複雑な研究課題、さらにはインドネシアの遠隔地を探索する機会を得ることができました。こうした研究はすべて、私とインドネシアとの密接なつながりと、この素晴らしい群島の歴史と文化について、より深くそのつながりを学びたいという願いから続いています。